

自註現代俳句シリーズ・12期 31

田所節子集



公 益
社 団 法 人
俳 人 協 会

花満開ひとり歩むは飢ゑに似て

昭和五三年作

ひとりでいることは気楽ではあるが淋しい。特に
周りが明るく華やかな時ほど淋しさを感じる。

その幹の昏さは知らず花満つる

昭和五三年作

満開の桜の明るさと違って、幹は無骨とも言える
ほど黒々と「しごこつ」と立っている。幹の心を桜は
知っているのだろうか。

陽と遊ぶコスモスへ子の車椅子

昭和五四年作

長女が脊髄炎を患った。まだ麻痺が残っている子
を車椅子で病院の庭へ連れ出す。自然が不思議なほ
ど美しく力強く見えた。

試歩の子の腰より崩れ鱗雲

昭和五四年作

この「鱗雲」は林翔先生が置いてくださった。天
を仰ぐ気持が出るでしょ。身近に俳句のあること
がありがたかった。

雨を来て藻のはじめての花に逢ふ

昭和五六年作

この時はじめて藻の花を教えて貰った。白い、雨粒のような小さな花が可愛かった。

何の日となけれど夫に薔薇貰ふ

昭和五六年作

夫が会社の帰りに買ってきてくれた薔薇。思ったままに句になっているのだろうかと句会に投句。「何の日となけれど」がいいねと誉めて頂いた。

引きさがる一歩が見事西瓜割る

昭和五六年作

子供達と海などでよく西瓜割りをした。目隠しをした人を囲んでわいわいと囃す楽しさ。この句で「沖」の初巻頭を頂いた。

完敗の帰り浮巢が見たくなる

昭和五六年作

句会などで全く点が入らないとどごと疲れがでる。何となくひとりになりたい気分。そんな時は浮巢を見に川の方へ廻り道してみる。

白地着て意を通すこと減り給ふ

昭和五六年作

「父は」と前書きがある。水戸生まれの田所の父は昔はかなり厳しかったようだ。だが、最近はすっかり穏やかになった。

いま積みし藁堆にもたれて箸つかふ

昭和五六年作

東北へドライブした時の車窓風景。積まれたばかりの藁堆に凭れて弁当を食べている。日が燦燦と当たって、とても幸せそうに見えた。

雨傘をくるりと廻し合格す

昭和五七年作

合格発表の日はいにくの雨だった。掲示板を見ている大勢の中、くるりと振り向いた子。明るい笑顔が合格を告げていた。

寝足らひし身やや火照る朝桜

昭和五七年作

久しぶりによく眠り、すっきり目覚めた。こんな日は何となく身も軽くきびきび動ける。桜の美しい季節。

母の手が近くにありて泳ぎ初め

昭和五七年作

水を怖がつてなかなか泳がない子。ここまで泳いでおいでと、差し出す手へ二つ三つ水掻きする。ほら泳げたでしょ、と誉めてやる。

歌がるた灯の輪の端に父を置き

昭和五八年作

家族だけのお正月、いつもの通り母が歌留多を読む。子供達が歌留多を取る様子を、少し離れてお酒を飲みながら見ていた父。

時間いま雫となりて軒水柱

昭和五八年作

屋根に降り積もった雪が水柱となり、いま日ざしが溶かし始めている。ふとこれまでの時間と消えてしまう時間を思った。

ひとり酌みゐて亀鳴くを聴く父か

昭和五八年作

父はとにかくお酒が好きだった。いつも手酌だった。病を得てからも、お酒と聞くと嬉しそうな顔をした。

答合せして臙めく志望校

昭和五八年作

高校入試を終わって答合せをしている。担任の先生からは大丈夫と言われていても、間違いがあるとはやはり心配になってくる。

卒業の膝の手何か怵へをり

昭和五八年作

長男の卒業式。小学校の講堂の椅子に整列して座っている。膝の手がかすかに震えていた。帰省子へ抽斗一つ空けて待つ

帰省子へ抽斗一つ空けて待つ

昭和五九年作

一年間の留学を終えて帰宅する子。アメリカからどんな様子で帰ってくるのだろうか。取りあえず整理ダンスの抽斗を空っぽにしておく。

畝立つる秋意真白き紐を置き

昭和五九年作

紐を置いて畑の畝を立てているのを見て少し驚いた。慣れて、真っ直ぐに畝が立てられると、ばかり思っていたから。

略歴

昭和十五年十二月大阪に生まれ富山に育つ。

昭和五十年小径会入会。林翔に師事。

昭和五十二年「沖」入会。能村登四郎に師事。

昭和五十八年「沖」同人。

「沖賞」「沖功労賞」受賞。

句集「花標」、「涼しき嵩」上梓。

「沖」同人会副会長、千葉県俳句作家協会事務局長、

俳人協会会員。

自註現代俳句シリーズ12期⑬ 田所節子集

（税別） 価格二〇〇円

平成三十年七月二十日 印刷
平成三十年七月二十五日 発行

著者 田所節子
発行者 能村研三

印刷 親文社

〒109-8521 東京都新宿区百人町三二八-10

俳句文学館内

発行所 俳人協会

公社
社団法人

電話 〇三(三三三六七) 六六二一
FAX 〇三(三三三六七) 六六五六